

散逸物語『ひとりごと』覚書

辛島, 正雄

九州大学大学院人文科学研究院文学部門国語学国文学 : 助教授 : 日本中世文学

<https://doi.org/10.15017/1185>

出版情報 : 文學研究. 100, pp.1-25, 2003-03-31. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

散逸物語『ひとりごと』覚書

辛 島 正 雄

一 はじめに

王朝物語を読む楽しみのひとつに、それぞれの物語に登場する女君たちに注目し、その運命のさまざまを味わうことが上げられるように思うのだが、そうした多種多様な境遇の女君たちのなかでも、男たちにとって、望んでも手が届かない、というより、そもそも望むことを禁じられた神聖な存在であるがゆえに、独自の存在感を示すものとして、伊勢の齋宮がある。もともと、王朝物語においては、『伊勢物語』第六十九段に見るような、齋宮じしんの恋として描かれることは絶えてなく、すべて伊勢退下後に、前齋宮さきのとして、その存在に照明が当てられることとなる。そのうち、『我身にたどる姫君』に登場する前齋宮については、その特異性をめぐり、かつて私見を述べたことがある（拙著『中世王朝物語史論 上巻』二〇〇一年、笠間書院）第II部・五「女の物語」としての『我身にたどる姫君』——女帝と前齋宮と」を参照）。

ところで、往時の物語世界の広がりや豊かさを窺うべく、散逸物語の宝庫である『風葉和歌集』を読んで、やや意外の感を抱かされるのが、齋宮関係の記事の思いのほかの少なさである。具体的にいえば、それは、『源氏物語』「賢木」巻のほかには散逸物語二作品に見えているにすぎず、齋宮と相並ぶ存在である賀茂の齋院関連の記事が、

『源氏物語』『狭衣物語』をはじめとする合計十二作品もの多くに見えるのと比較すると、その差は歴然である(詳しくは、所京子著『斎王の歴史と文学』(二〇〇〇年、国書刊行会)第三部・第十章「『風葉集』にみる物語斎王の関係と歌」を参照)。もつとも、『風葉和歌集』から知りえないだけで、『物語二百番歌合』には斎宮の記事が載る『露の宿り』のような作品もないのではないのだが、こうしたなか、斎宮関係の記事を含みもつ物語のひとつが、『ひとりごと』である。

散逸物語『ひとりごと』は、『風葉和歌集』に五首の作中歌が採られ、かろうじて物語の片鱗を今にとどめているが、それ以外には伝来を示す資料も知られず、『源氏物語』の影響が顕著に窺えることを除けば、成立の時期も定かでない作品である。内容の復原に関しては、後述するように、小木喬氏の著書において委細を尽くした考察がなされておられ、その後もとくに異論が出ることはなかったようである。本稿では、このように、どちらかといえば問題点の少なそうなこの物語に注目し、残された資料をあらためて読み直すことで、再検討の俎上にのぼせてみたいと思う。

二 『ひとりごと』断片

まず、『風葉和歌集』に採られた歌五首を、次に示すこととするが、その解釈の現状を知るために、あわせて、同集の唯一の注釈書といふべき樋口芳麻呂校注『王朝物語秀歌選(上)・(下)』(岩波文庫)『(一九八七・一九八九年、岩波書店)に付された注をも掲げておく。

A 斎宮せきこえ給ひぬときこしめしてよませ給ひける

ひとりごとのみかどの御歌

別てふつげのをぐしもさしてしをまたせきこゆと聞くぞ悲しき

(卷八・離別・五五六番。以下、歌集の引用は『新編国歌大観』による)

○せき―逢坂の関。○ひとりごと―散逸物語。

◇別れという黄楊の櫛も挿したのであったが、また関を越えると聞くのが悲しい。「別れの櫛」と『源氏物語』『賢木』の卷にあるように、天皇は大極殿で、齋宮の額に黄楊の小櫛を挿し、「京の方へ赴き給ふな」と言われる。

*

〔B〕 ははそひていせにくだるべきにて侍りける、わづらふことありてとまりにければ、あふみたち給ふ日つか

はしける

ひとりごとの齋宮女御

あふみてふ名をたのめどもひとりけふたつはかひなしがのうら浪

かへし

按察大納言女

もろともにたたましものをよそにのみ聞くぞかなしきがのうら波(卷八・羈旅・五七四―五七五番)

◇「逢ふ身」という名を頼みにしてはいますが、琵琶湖の湖岸に波が立つのを見ながら、独りで今日近江の国を出立するのは、張り合いのないことです。

◇病氣にならなければ、いっしょに旅立ったでしょうに、琵琶湖の波を自分には無関係なものとして聞くだけなのが悲しい。『詞花和歌集』別・和泉式部「もろともにたたましものをみちのくの衣の関をよそに聞くかな」によるか。

*

〔C〕 女のもとよりかへりてあしたに

ひとりごとの弾正のみこ

分けきつる野原の露もまだひぬに袖さへぬれてかへりぬるかな(卷十二・恋二・九二二番)

◇分けながら来た野原の露もまだ乾かないのに、袖までが涙にぬれて帰ったことです。

*

D をとこの、みまうくばまでこじ、こころになんあるべきといひけるに

ひとりごとの按察大納言女

いかにせんたえなんもうし青つづらくるはくるしと思ふものから（巻十四・恋四・一〇一七番）

○みまうくばまでこじ、云々逢うことがおいやなら、参上いたしますまい。あなたのお気持しいです。

◇いったいどうしたらよいのでしょうか。あなたとの仲が絶えてしまうのも情ないし、そうかといって、おいでになるのはつらいと思うものですから。「青葛」はつる草の一種で、「くる」（繰る・来る）の枕詞。

三 先行研究の概要

散逸物語『ひとりごと』についてのまとまった研究としては、小木喬著『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』（一九七三年、笠間書院）での当該項目が、ほとんど唯一のものである。いま、その論の要点を整理すれば、次のごとくである。

資料A・Bから「すぐに思い浮かぶのは「源氏」の秋好中宮のことである」（七四一頁）。Aの歌は、「この帝が、御自ら齋宮に御櫛をさし給うたことを意味し、その齋宮が逢坂の関を越えたと聞こしめして「逢ふこと」のない、逢坂を越えられないことを嘆かれたのである。まさに「源氏」の朱雀帝そのままである」（七四一頁）。また、Bの「詠人名によれば、齋宮は後に女御となったのであるし、按察大納言女がその母であることがわかる」（七四一頁）。そして、Aの「詠人名の示すように、物語最終時においても、この帝が御位にあったのである。そうすると、この齋宮は御代半ばにして退下し、女御となったものと考えられる」（七四二頁）。こうした事例を史実に求めると、重明親王の娘である徽子女王が、朱雀天皇の御代の齋宮として下向したものの、母の喪によつ

て退下、その後、次代の村上天皇の女御となった例がある。「齋宮は帝の御代ごとに変るべきであるから、櫛をさして送られた帝ではなく、その次以降の帝の女御になる」(七四二頁)のが普通であり、秋好中宮の場合も、徽子女王の場合も、そのようになっているのであるが、この物語がそれらと異なるのは、「源氏」朱雀院の深い愛情をもし実現させたらという、女らしい気持から、この物語が書かれた「せいであり、「作者は女性であったであろう」(七四二頁)。

また、**C**・**D**「二つを並べてみれば、男は彈正親王で、女は按察大納言女であるとしても、まず誤ってはいないであろう」(七四三頁)。これを**B**と「照し合わせるとき、齋宮は親王を父とし、按察大納言を母とした方、すなわち王女であるというのも当っているであろう」(七四三頁)。**C**の歌は、「おそらく初めて契を結んだ翌朝、男から送った歌であろうが、これには秘密の恋らしい様子は少しもない。しかし、普通ならば、按察大納言女であるから、親王の正妻として、「北方」あるいは「上」とあるべきであるのに、そうなっていないのは、何かわけがあったのであろう」(七四三頁)。**D**は、『風葉和歌集』の部立からすると、「絶える恋」の歌と思われる……そうして恋は絶えたものと思われる。だがその間の事情は一切わからない。おそらく彈正親王北方と称せられなかった理由と関連があることは推測されるけれど」(七四三頁)。

題号の由来については、「本物語の構想が「源氏」賢木卷以降の朱雀院と秋好中宮の関係に基づくことから」(七四三頁)、「賢木」卷に、光源氏が逢坂の関を越えた六条御息所を思いやって、「霧いたう降りて、ただならぬ朝ぼらけに、うちながめて、ひとり、ごちおはす」(七四四頁。圈点ママ)とあるのと同様に、「この物語では、帝が齋宮を思いやって、「ひとりごちおはし」たのではあるまいか」(七四四頁)。そして、**A**の歌こそが、そのおりのものであろう。

まことに周到、間然するところのないみごとな考察であり、失われた物語の輪郭が、くつきりと浮き上がってくる感がある。その後に編まれた物語目録類が、これをそのまま踏襲したのも、もつともなことであつたらう。例え
ば、神野藤昭夫・原國人・藤井貞和「物語文学総覧700」〔解釈と鑑賞〕45巻1号、一九八〇年一月)には、
ひとりごと

散佚。風葉5。按察大納言女は彈正のみことの恋に悩む。娘の齋宮と共に伊勢下向の筈も病氣の為都にとど
まる。齋宮は後女御となる。源氏秋好中宮をめぐる話の影響あるか。(一一七頁)

とあり、また、三角洋一「物語文学全覧」〔別冊国文学〕32号「王朝物語必携」一九八七年九月)でも、
ひとりごと

散逸。風葉5。彈正宮と按察使大納言女とのあいだに生まれた女王が齋宮となり、のち女御になる。源氏物語
の秋好中宮を模す。(二八八頁)
のごとくにまとめている。

五首が知られる作中歌の本歌や類歌としては、**B**の返歌について樋口氏の指摘があるほか、神野藤昭夫「散佚物
語事典―鎌倉時代物語編―」(三谷榮一編『体系物語文学史 第五巻 物語文学の系譜III 鎌倉物語2』一九九一年、有精
堂)所収)が、**D**の歌について、次の歌によるものであることを指摘している。

題不知

読人不知

こぬもうくくるもくるしきあをつづらいかなるかたにおもひたえなん

(『後拾遺和歌集』卷十二・恋二・六九三番)

二つの歌を対照すれば、

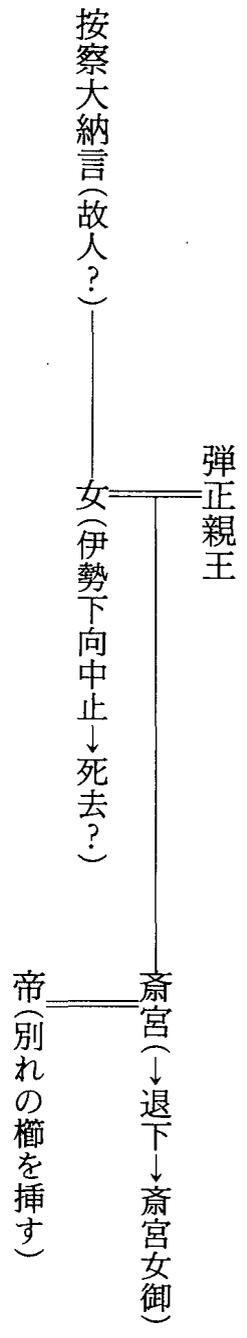
いかにせんたえなんもうし青つづらくるはくるしと思ふものから
 ・こぬもうくくるもくるしきあをつづらいかなるかたにおもひたえなん

のごとき密接な対応関係があり、従うべきであると思われる。なお、「読人不知」の歌であるため、詠作年次不明ながら、この歌が『後拾遺和歌集』以外に見えないことから、これによったものとすれば、本物語の成立時期を考えるさい、上限の目安となる。

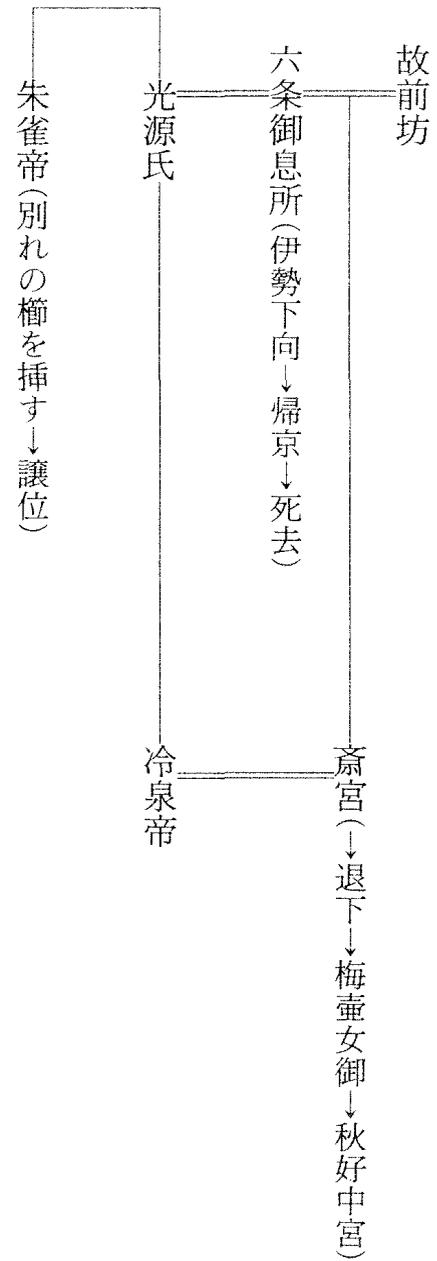
また、神田龍身・西沢正史編『中世王朝物語・御伽草子事典』（二〇〇二年、勉誠出版）所収の「散佚物語事典」では、題号「ひとりごと」について、これを「歌句に有する歌は希少だが、平安後期以降わずかに見出される」（五九四頁）として、二つの例（『行尊大僧正集』と『建礼門院右京大夫集』）を紹介している（この項の執筆者は、鈴木泰恵氏）。

四 『ひとりごと』と『源氏物語』

さて、小木氏の論に基づき、『風葉和歌集』の詞書等から推定される『ひとりごと』の登場人物の関係を系図にすれば、次のようになる。



これに対して、粉本と目される『源氏物語』では、次のような人間関係であった。



『ひとりごと』と『源氏物語』との類似点については、すでに小木氏の詳しく述べるところであるが、両者の系図を並べたついでに、多少の補いをするならば、『ひとりごと』の按察大納言女と斎宮の母娘が一緒に伊勢下向しようとするのが、六条御息所母娘による同様のケースの踏襲であることについては、ぜひとも再確認しておきたい(ただし、『ひとりごと』では母の下向が取り止めになるのだが)。斎宮の下向に母が同道することは、『源氏物語』において、出発前の「賢木」巻では、「親添ひて下りたまふ例もことになけれど」(「新編日本古典文学全集」本②八三頁)とのことわりがつき、また、帰京後の「漣標」巻でも、「斎宮にも親添ひて下りたまふことは例なきことなるを」(②三一八頁)と、重ねて記されていることからわかるとおり、きわめて異例のことであった。史実としては、小木氏も言及していたように、徽子女王が娘の規子内親王の伊勢下向に伴った事例が唯一知られるのみで、それゆえこの一件は、古注以来、六条御息所母娘による伊勢下向の准拠とされてもきた。

ここで、小木氏の考察の盲点が、ひとつ明らかにになる。氏は、『源氏物語』における朱雀院と秋好中宮との関係に注目し、それを重視した結果、六条御息所母娘と『ひとりごと』の按察大納言女母娘との関係については、ことさ

ら言及することをしなかつたのだが、『ひとりごと』では、**〔D〕**の歌に見るごとく、母である按察大納言女の恋の苦悩も描かれていたのであり、それは、『源氏物語』に当てはめれば、六条御息所と光源氏との関係に相当する。そして、六条御息所の恋が破綻をきたしたごとくに、按察大納言女の恋も不調に終わったもののごとくなのである。

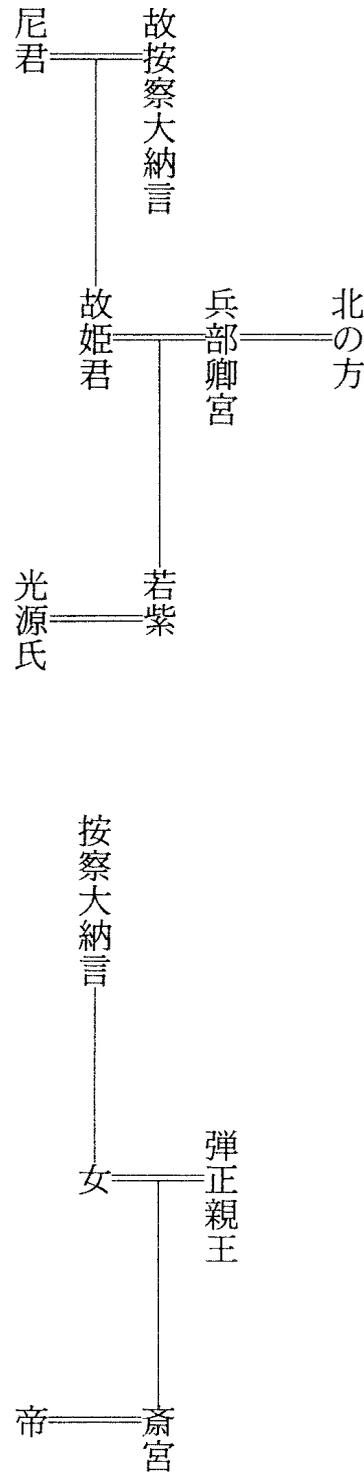
ところで、**〔C〕**の歌に、「分けきつる野原の露もまだひぬに」とあることから、そのおりの女の境遇が察せられる。すなわち、父大納言が健在で、その邸に弾正親王を通わせたのであるならば、「野原の露」に濡れて訪れるはずがないから、女はすでに後見を失い、茅屋にわびしく住まう身の上であつたことになる。これは、夫に先立たれながらも、風雅で聞こえた六条御息所の暮らしぶりと比較すると、ずいぶん違つていようにも見えるが、物語における男女の出会いの類型からすれば、『うつほ物語』の「俊蔭」巻以来、むしろ定石どおりであるともいえる。

父が「按察大納言」であることについては、王朝物語を広く見渡すと、この「職名を与えられる人物の意志にその娘を入内させるという傾向があ」とする、久下晴康（裕利）氏の所論（同氏著『平安後期物語の研究^{狭衣}』第二章・三「狭衣物語」の影響——「物語取り」の方法から——）「一九八四年、新典社」一二四頁）が想起されるところであり、例えば、「若紫」巻に、

故大納言（＝按察大納言）、内裏に奉らむなどかしこういつきはべりしを、その本意のごとくものしはべらで過ぎはべりにしかば、ただこの尼君ひとりもてあつかひはべりしほどに、いかなる人のしわざにか、兵部卿宮なむ忍びて語らひつきたまへりけるを、もとの北の方やむごとなくなきとして、安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなん亡くなりはべりにし。（①二二二～二二三頁）

と語られる若紫の母の境遇などは、『ひとりごと』の按察大納言女の身の上に、そのまま転用できそうにも思われる。小木氏も、按察大納言女が、弾正親王と結ばれながら、正妻として遇されていないことについては、「たとえば、桐壺更衣のように、「父の大納言は亡くなりて」であつたかもしれないし、また親王には既に「やんごとなき」正妻が

あったためか、あるいは、その両方であったためかもしれない（七四三頁）と推測するところであった。この「若紫」巻での人物関係を、『ひとりごと』の按察大納言女の出自の雛型と見なせば、次に示すような対応関係となる。



すなわち、「若紫」巻では簡単に触れられるにすぎなかった若紫の母の、いわば、語られざるありし日の物語を、『ひとりごと』では再現したとの趣である。ともあれ、仮に、『ひとりごと』の按察大納言にも、娘を「内裏に奉らむ」の遺志があつたとすれば、結果としてそれは、娘の代ではなく、孫の代になって実現したことになる。

さて、『ひとりごと』の按察大納言女と弾正親王との関係が、六条御息所と光源氏との関係を意識したものであるらしいことは、**[D]**の詞書に、男が、「みまうくばまでこじ、こころになんあるべき」と、女をもてあましたような、投げやりないかたをるところからも、窺えるようである。これは、「葵」巻で、光源氏が、六条御息所との関係を煩わしく思つて、その苦惱も知らぬげに、

数ならぬ身を見まうくば、思し棄てむもことわりなれど、今は、なほいふかひなきにても、御覽じはてむや浅からぬにはあらん。(②三一頁)

といいがかりをつけるあたりを彷彿させるものがありはしないか。Dの歌も、男との関係について、断絶と継続とはさまざま迷っているところが、光源氏に対する絶望と未練とはさまざま揺れる六条御息所の心情と、通いあうものがある。

こうして見ると、『ひとりごと』の構想は、按察大納言女とその娘である齋宮の運命を、六条御息所母娘の物語の大枠を借りて描き出そうとしたものであつたかと考えられる。従来は、娘の齋宮と帝との関係に注意が向けられるいっぽう、母の存在はやや軽く見られてきたように思われるが、神野藤氏が、『源氏物語』の六条御息所と齋宮の設定に類似する」(前掲「散佚物語事典—鎌倉時代物語編」四三二頁)と的確に指摘していたごとくに、母と娘との関係にこそ、『ひとりごと』という物語の特質が、端的に表われていたのである。

ところで、『ひとりごと』の齋宮が、秋好中宮の場合とは異なり、別れの櫛を挿した当の帝の女御となつたと見るべきであることは、小木氏の鋭く指摘するところであつた。そして、このような設定になつた理由についても、「朱雀院の深い愛情をもし実現させたら」というような「女性らしい」発想があつたせいではないか、と推測していたのであるが、そうした裏事情は、たしかにありえたことかもしれない。というのも、『無名草子』を見ると、その光源氏評に、「頭中将の友情を裏切つたことを指弾して、「それを思ひ知らず、よしなき取り娘して、かの大臣の女御と挑みきしろはせたまふ、いと心憂き御心なり」(『新編日本古典文学全集』本一九八頁)とあつたり、女性評にも、「(六条御息所)御子の中宮も、我から心用ゐなど、いといみじく、心にくき人の中にも交ぜきこえつべきが、などやらむ、嫉ましきは、源氏の大臣のあまりにもてなしたまふが、心づきなかるべし」(一九四頁)とあつて、秋好中宮が光源氏の養女となつて手厚くもてなされたことが、どうも読者の不評をかつているように見受けられるからである。

朱雀院の秋好中宮に対する恋情がなみなみでなかつたことも、小木氏の説くとおりであり、齋宮の伊勢下向後に光源氏が対面したおりに、「かの齋宮の下りたまひし日のこと、容貌のをかしくおはせしなど語らせたま」(②一二四

頁)うたとあり、深く心に刻んでいたことが知られる。ただし、両者のやりとりが具体的に描かれるようになるのは、それから八年ほどが経過した讓位後のことであり、**A**に見るような状況で朱雀帝が歌を詠むことはない。代わって、別れ行く者たちの心情を歌に託したものとしては、これも小木氏指摘ずみのことながら、光源氏と六条御息所とのやりとりが描かれている。

讓位した朱雀院は、齋宮の帰京後、六条御息所存命中から、前齋宮の参院を望む消息を送りつづけていたことが記されている(「濔標」卷②三一九頁)が、院の歌が紹介されるのは、冷泉帝への入内当日のことであった(「絵合」卷)。わかれ路に添へし小櫛をかごとにてはるけき仲と神やいさめし(②三七〇頁)

Aの歌に、「別てふつげのをぐしもさしてし」とあつたのと同様、別れの櫛のことが詠まれている。前齋宮の返歌は、別るとてはるかに言ひしひとこともかへりてものは今ぞかなしき(②三七二頁)

というものであつたが、**A**の歌とは、「別るとて……今ぞかなしき」と「別てふ……聞くぞ悲しき」という歌の姿が、多少似ていなくもない。

さて、『ひとりごと』の齋宮は、御代替わりを待たず帰京したと思われるのだが、これは、秋好中宮の場合とは異なっている。齋宮が任半ばにして帰京したのには、しかるべき事情があつたはずだが、のちに女御となつていくことからすれば、不祥事を起こして解任された、というような想定は、論外である。とすれば、小木氏の推定のように、肉親の死により、服喪のため帰京したと見るのが穏当であり、そのような史実に、母の喪に服するため退下した徽子女王の事例があることも、小木氏の指摘するとおりである。齋宮の母である按察大納言女は、**B**の詞書から、病氣により伊勢下向を中止したことがわかるから、その後も快方に向かうことなく、やがて他界したということは、十分に考えられそうである。そうになると、齋宮の実父である弾正親王も、按察大納言女との仲は不調に終わったものの、さすがにその死を悼んで、帰京した傷心の齋宮には、父親として、せめてもの誠意を見せようとしたであろう

う。そして、前齋宮の入内を望む帝の意向もあり、母の喪が明けたしかるべき時期に、入内させた、というような次第でもあったろうか。この弾正親王は、六条御息所に対する光源氏に相当する役回りの人物のようであるが、齋宮の実父でもあるので、光源氏が六条御息所の死後、前齋宮を養女にして、朱雀院の意向を知りながら、それを無視、冷泉帝に入内させる、といったふうな、込み入った展開とは無縁である。

以上、『散逸物語』『ひとりごと』は、『按察大納言女に若紫の母の面影が看取されることを除けば、全体としては、『源氏物語』の六条御息所母娘に、光源氏と朱雀院の二人の男性を配したような人物設定のなされた作品であったかと推定されるのであるが、両者の展開の類似点と相違点とがはっきりするように、対照して示せば、次のようになる。

『ひとりごと』

A 按察大納言女は、父大納言歿後、不如意な生活を送っていた
B 弾正親王は按察大納言女の存在を知り、通うようになる
C 按察大納言女、弾正親王との間に女兒が誕生
D 按察大納言女と弾正親王との仲、しっくりゆかず、親王は正妻に憚って、通いも思うに任せなかったか
E 弾正親王の娘が齋宮に選ばれ、母である按察大納言女は、伊勢下向に伴うことを決意

『源氏物語』

a / c 六条御息所は、かつて春宮妃として女兒をもうけたが、春宮は逝去
b 光源氏は高貴で教養ある女性を求めて六条御息所に接近、恋仲となる
d 六条御息所と光源氏との仲、しっくりゆかず、光源氏は葵の上歿後も、御息所を妻として遇そうとせず
e 六条御息所、娘が齋宮に選ばれ、伊勢下向に伴うことを決意

F 帝、齋宮に別れの櫛を挿し、出発を悲しむ

f 朱雀帝、齋宮に別れの櫛を挿し、出発を悲しむ

G 按察大納言女、病により京にとどまり、齋宮ひとりで伊勢に下向

g 六条御息所と齋宮、無事伊勢に到着

H 按察大納言女、死去

h 御代替わりによつて齋宮も交替、母娘そろつて帰京

I 齋宮、母の服喪のため任を解かれ、帰京

i 六条御息所、死去、前齋宮の処遇を光源氏に託す

J 帝、前齋宮の入内を望む

j 朱雀院、前齋宮の参院を望む

K 前齋宮、入内、女御となる

k 光源氏、前齋宮を冷泉帝に入内させる、朱雀院、縁の薄かったことを嘆く

薄かったことを嘆く

五 『ひとりごと』と史実

ところで、すでに触れたとおり、『源氏物語』における六条御息所母娘の伊勢下向は、徽子女王が娘の規子内親王の伊勢下向に伴った史実を彷彿させるように描かれているのだが、よく似た母娘の伊勢下向という趣向をもつ『ひとりごと』の場合、たんに『源氏物語』に倣ったということですませてよいのであろうか。

まず、徽子女王と娘の規子内親王の生涯を、簡単に整理しておく。

延長七年（九二九）徽子女王誕生、父は重明親王、母は藤原寛子（忠平女）

承平六年（九三六）九月、徽子女王（八歳）を齋宮に卜定

天慶元年（九三八）九月、徽子女王（十歳）伊勢に群行

天慶八年（九四五）正月、徽子女王（十七歳）、母の喪により退下、八月、帰京

天慶九年（九四六）四月、朱雀天皇讓位、村上天皇即位

天曆二年（九四八）十二月、徽子女王（二十歳）、村上天皇に入内

天曆三年（九四九）四月、徽子女王（二十一歳）、女御となる、規子内親王誕生

天曆八年（九五四）九月、重明親王薨ず（四十九歳）

応和二年（九六二）九月、徽子女王（三十四歳）、皇子を産むも夭折

康保四年（九六七）五月、村上天皇崩御（四十二歳）、冷泉天皇即位

安和二年（九六九）八月、冷泉天皇讓位、円融天皇即位

天延三年（九七五）二月、規子内親王（二十七歳）を齋宮に卜定

貞元二年（九七七）九月、規子内親王（二十九歳）、伊勢に群行、徽子女王（四十九歳）も同道

永観二年（九八四）八月、規子内親王（三十六歳）、円融天皇讓位により退下

寛和元年（九八五）四月、規子内親王（三十七歳）、母とともに帰京、徽子女王卒す（五十七歳）

寛和二年（九八六）五月、規子内親王薨ず（三十八歳）

これを見ると、『源氏物語』では、六条御息所母娘がともに伊勢に下ったことだけでなく、御代替わりにともない帰京し、ほどなく母が歿する、というところまで、徽子女王の後半生の事跡と重なりあうことがわかる。そして、その後の前齋宮の入内に、かえって徽子女王の前半生が、透かし見られることとなる。これに対して、『ひとりごと』では、按察大納言女の伊勢下向は停止され、結果的に齋宮は、慣例どおり単身で伊勢に向かい、任半ばにして、おそらくは母の喪により帰京、その後入内して、「齋宮女御」と呼ばれるようになるわけだから、これは、『源氏物語』の模倣というより、むしろ、歴史上の「齋宮女御」＝徽子女王の前半生に、そのまま重なってくる。もちろん、『ひとりごと』のように前齋宮がすぐさま当帝の女御となるのは、史実として例のないことであり、徽子女王の場合と

も違っているわけだが、父が親王であるということも含めて、『ひとりごと』の斎宮女御の人物像は、「前坊の姫宮」(「葵」巻②一八頁)という出自の秋好中宮よりも、徽子女王の身の上に近いのである。

かくて、『ひとりごと』は、『源氏物語』の強い影響下にありながらも、その『源氏物語』が准拠として取り込んだ徽子女王をめぐる史実に、あらためて着目した作品ではなかったか、と思われる。そして、そのことが、題号についても影を落とすこととなったのではあるまいか。

六 『ひとりごと』題号考

物語『ひとりごと』の題号の由来については、前述のように、「賢木」巻に光源氏が「ひとりごちおはす」と描かれていることと関連づけた小木氏の推測があり、所氏も、「そうであるかもしれない」と賛意を表明している(前掲論文二九四頁)。また、樋口氏校注の『風葉和歌集』の作品名表記も「独り言」となっているのだが、この物語が徽子女王を意識したものであるとすれば、「ひとりごと」には、「独り琴」が掛けられているものと予想して、しかるべきではあるまいか。

徽子女王の詠歌といって、即座に思い浮かぶのが、絶唱として名高い次の歌である。

ことのねにみねのまつかぜかよふなりいづれのをよりしらべそめけむ(『斎宮女御集』五七番)

この歌は、斎宮に卜定された規子内親王が嵯峨の野宮に入った貞元元年(九七六)、十月二十七日の庚申の夜の歌会において、「松のかぜよるのことにいる」という題で詠まれたものであり(『順集』一六三番詞書)、「賢木」巻では、光源氏が野宮に六条御息所を訪うくだりに、「松風すごく吹きあはせて、そのことも聞きわかれぬほどに、物の音ども絶え絶え聞こえたる、いと艶なり」(②八五頁)と引かれている。

『斎宮女御集』を見ると、徽子女王がひとり琴を奏する姿は、一五番の詞書に、

うへ、ひさしうわたらせ給はぬ秋のゆふぐれに、きむをいとをかしうひき給ふに、上、しろき御ぞのなえたるをたてまつりて、いそぎわたらせ給ひて、御かたはらにゐさせ給へど、人のおはするともみいれさせたまはぬけしきにてひき給ふを、きこしめせば

のように描かれているが、ほかに、九番の詞書には、「もろともに御ことひかせたまひて」と、村上天皇との合奏のことが、一六四番の詞書には、「八月ばかりに、月のあかき夜、御ことどもしらべたまふに」と、規子内親王との合奏のことが見えており、一六九番の詞書には、徽子女王に琴を教授していた女房のことが見える。

『齋宮女御集』が物語の素材となったかどうか、その詮索をしたいわけではない。要は、実在の齋宮女御徽子女王へと連想を禁じえない物語が「ひとりごと」と題されるとき、「独り言」の意で解くのがふつうだとしても、「こと」には、不可避的に「琴」が引き寄せられざるをえない、という事情があったらうことを、明確にしておきたいのである。

ひるがえって、「ひとりごと」ということばの性格を考えると、物語の題号に採用されはしたものの、歌語とはいいいにくいものである。その使用状況について見当をつけるため、宮島達夫編『古典対照語い表』（一九七一年、笠間書院）で検すると、名詞の「独り言」は、『土佐日記』1、『蜻蛉日記』2、『源氏物語』6、それを動詞に活用させた「独りごつ」は、『蜻蛉日記』2、『枕草子』2、『源氏物語』32、『紫式部日記』1、『更級日記』4、という数字が示してあり、すべて散文中の用例であることから、いわば、なんの変哲もない日常語であったかと思われる（もつとも、「ひとりごと」に歌を詠む、といった例は、前述来の「賢木」巻ほか、枚挙に遑がないほどであり、和歌と縁の薄い語というわけでもない）。そのことを裏書きするかのようには、『CD-ROM版新編国歌大観』を用いて、「ひとりごと」を詠み込んだ和歌を検索しても、前掲「散佚物語事典」が指摘する二首以外に、平安後期まで遡る例はなく、さらに、「ひとりごた」「ひとりごち」「ひとりごて」のように活用させて検索しても、『拾玉集』と

『高倉院升遐記』から一首ずつが拾えるにすぎない。とはいえ、そうしたなかの一例に、「独り琴」の用例が含まれているのは、注意される。

頭中将さねむねの、つねに中宮の御かたへまゐりて、びはひき、うたうたひあそびて、ときどき、ことひけなどいはれしを、ことざましにこそ、とのみ申してすぎしに、あるをり、ふみのやうにて、ただかくかきておこせられたり

松風のひびきもそへぬひとりごとはさのみつれなきねをやつくさむ

かへし

よのつねの松風ならばいかばかりあかぬしらべにねもかはさまし（『建礼門院右京大夫集』四く五番）

琵琶の名手であった藤原実宗が、父母ともに箏の名手として名高い右京大夫との合奏を希望するものの、腕前を謙遜して応じようとしない、というのであるが、二人のやりとりは、いうまでもなく、徽子女王の「ことのねに」の歌によっている。

ところで、『古典対照語い表』には、「独り琴」も項目に立てられているのだが、さすがに例は少なく、『源氏物語』5、『紫式部日記』1、となっている。ただし、これらもすべて散文中の用例であり、右の『建礼門院右京大夫集』の例が、和歌における唯一の例ということになる。すると、『ひとりごと』の作中歌に「独り琴」が詠み込んであった可能性も、かなり疑わしくなってくる。

それでもなお、**[B]**の齋宮女御の歌に、「ひとり、けふたつはかひなし」とあるのは、題号「ひとりごと」と関係するようにも見え、齋宮が、母と離れて、伊勢の地でひとり琴を弾くような場面は、あっても不思議はないと思われるのである。例えば、『紫式部日記』に、

風のすゞしき夕ぐれ、聞きよからぬひとり琴をかき鳴らしては、なげきくはると、聞き知る人やあらんと、

ゆゝしくなどおほえ侍こそ、をこにもあはれにも侍けれ。(『新日本古典文学大系』本三一〇頁)

と記されるような状況は、母が弾正親王との恋に苦しんでいたときにも、また、齋宮が伊勢で母を思いやりつつ過ごしているときにも、描きえたものではあるまいか。

それにしても、**B**でのやりとりから窺えるように、按察大納言女と齋宮との間の母娘の絆の強さのようなものは、きわめて印象的であるのだが、六条御息所母娘の場合、こうした絆がことさらに強調されることはないので、ここには、『ひとりごと』の独自性が現われている。そして、思うにこれは、『齋宮女御集』に見える、次のような贈答歌を意識したものだっただけではあるまいか。

もろともにくだり給ふ、すずかやまにて

よにふれば又もこえけりすずか山むかしのいまになるにやあるらん

みやの御かへり

すずかやましづのをだまきもろともにふるにはまさることなかりけり(二六二〜二六三番)

ともに伊勢へと向かう徽子女王と規子内親王の母娘であるわけだが、再度の鈴鹿越えに、昔のつらさの再現か、と嘆く母を、お母さまとともに過ごせるなら、なんのつらさもあります、と娘が励ましたものである。とくに、規子内親王による返歌は、**B**の返歌とは「もろともに」の語を共有しつつ、**B**の贈歌のほうでも、「ひとりけふたつかひなし」とあるのが「もろともにふるにはまさることなかりけり」を反転したような表現になっているなど、ただならぬ関係にあることを窺わせる。

こうして見ると、題号「ひとりごと」は、「独り言」に「独り琴」が掛けられているだけでなく、「ひとり」は「もろとも」の対義語であって、「もろとも」にあることを望みながらも、そのかなわない人間関係を暗示した命名であったかと思われる。すなわち——父に先立たれ、「ひとり」わびしく暮らす按察大納言女のもとに、弾正親王が通っ

てくるようになる。しかし、二人の間柄では、「もろとも」にあることは困難であった。それでも、娘が産まれてからは、母娘「もろとも」に過ごすことができた。後年、娘が齋宮に卜定されたときも、母はあくまで「もろとも」に伊勢へと下る予定であったが、出発を目前に、病により在京を余儀なくされ、ここで母娘「もろとも」の生活は、途切れてしまう。さらには、齋宮在任中に母が死去、娘は帰京しても、「ひとり」寂しく暮らすほかないと思われた。ところが、帝は、別れの櫛を挿して見送った齋宮のことを「ひとり」忘れられずにいて、帰京後は父である弾正親王に熱心に要請したものか、前齋宮は入内して、女御となる。かくて、最後になってようやく、齋宮女御には、帝との「もろとも」の生活がおとずれた——という次第である。

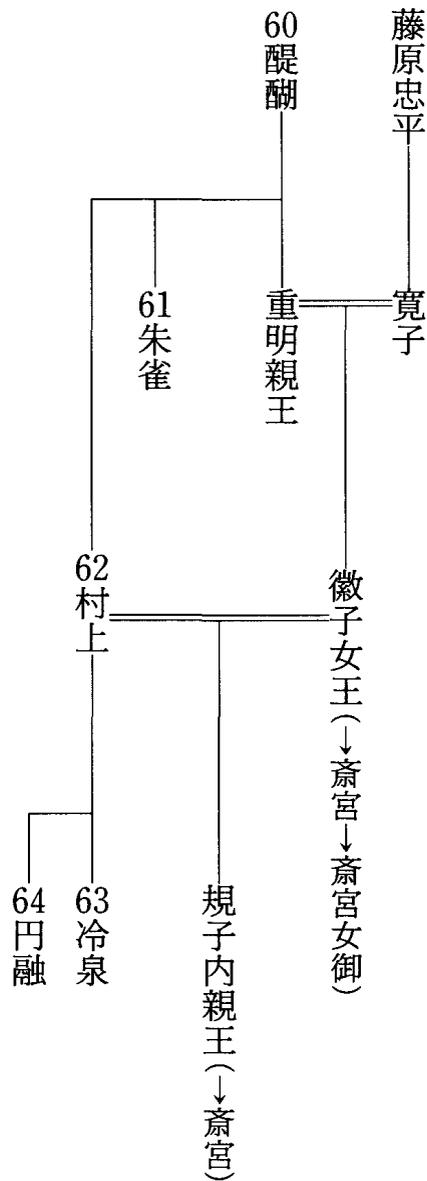
七 むすびにかえて——「弾正親王」小考

以上、散逸物語『ひとりごと』をめぐって、臆測をほしいままにしてきた感もあるが、筆者にとってもっとも興味深く思われたのは、この物語が『源氏物語』の甚大な影響下にありつつも、さらに、その『源氏物語』が准拠とした史実にまで遡って、登場人物のモデルとしたらしい事実である。こうした描きかたがなされた裏には、徽子女王に対する並々ならぬ関心があったものと想像されるが、それがなにに由来するものかは、けっきょくよくわからない。

『ひとりごと』が徽子女王を意識した物語であるとするれば、登場人物のあちこちに、実在の誰かの面影が宿っている可能性もありそうだが、いかんせん、片鱗のみからでは、それを窺うに詮ない。

徽子女王を中心にして系図を描くと、次ページのようになるが、例えば、『ひとりごと』の按察大納言女と弾正親王との関係は、寛子と重明親王との関係に重ねて見る事が可能である。しかし、娘が母の喪により齋宮を退下するという共通点以外には、積極的に重ねあわせたくなくなるようなことがらは乏しい。二人はれっきとした夫婦関係に

あり、寛子の父も、按察大納言どころか、関白太政大臣として権勢を極めた人物であるし、重明親王も、たしかに弾正尹を経てはいるものの、学芸に秀で、式部卿となり『吏部王記』を遺した重鎮であって、いずれも、物語の登場人物との差異のほうが際立つ。むしろ、徽子女王と村上天皇との関係のほうで、斎宮の伊勢下向に伴おうとしたことをはじめ、愛情生活が危機に直面していたらしいことなど、按察大納言女と弾正親王との関係の下型としては、適当かもしれない。



ところで、弾正台の長官である尹のポストは、従三位相当であるが、職掌の重なる検非違使庁の権限拡大にともない、名目のみの閑職となり、親王の就任することが多かった。『職原抄』下には、「多任^{イ大}親王。或又納言^{イ大}以上兼^レ之。勅任之官也。頗為^ニ重職。」(「新校群書類従」本三二頁)と記すのであるが、『栄花物語』「さまざまのよろこび」巻に、冷泉院の二人の皇子の元服に関連して、

三の宮をば弾正宮と聞えさす。四の宮をば帥宮と聞えさす。式部卿、中務卿、兵部卿などにては、村上^ノ先帝

の御子たちのみなおはしませば、かくなしたてまつらせたまへるなりけり。(『新編日本古典文学全集』本①一六六頁)

とあることから、同じく親王の任ぜられる長官といっても、おのずから序列のあったことが窺える。また、『枕草子』「にげなき物」の段には、「かたちよき君達の、彈正の弼ひぢにておはする、いと見ぐるし」(『新日本古典文学大系』本六三頁)とあって、そもそも彈正台の官人そのものに、ぱっとしたイメージがなかったものようである。そのせいか、『うつほ物語』に登場する彈正宮忠康(朱雀院の第三皇子、仁寿殿女御腹)も、叔母であるあて宮への恋に破れてからは、鬱屈して独身で過ごすような人物であるし、『源氏物語』を通じて、まったく姿の見えない官職でもある。しかるに、『ひとりごと』では、按察大納言女の恋の相手を、同様の境遇とおぼしき若紫の母の場合のように「兵部卿宮」などとはせず、ことさらに「彈正親王」とした。二番煎じを避けたにしても、どうして「彈正親王」なのか、なにより意味ありげに映ってしかたないのである。

前述のごとく、『ひとりごと』の彈正親王は、『源氏物語』との対応関係からは、六条御息所の恋人である光源氏に相当する役回りの人物のようであるが、按察大納言女母娘の造型が徽子女王をめぐる史実を意識したものであることから、彈正親王についても、実在の誰かを念頭に置いた可能性を、無視しきれないように思う。例えば、『続後撰和歌集』には、次のような詞書をもった歌があり、『ひとりごと』の[D]での状況を連想させるものがある。

彈正尹元平親王ひさしくかよひたえてのち、たちよりて侍りけるに、あひ侍らざりければ、かへりてうら

みつかはしたりける返事に

藤原俊蔭女

せかなくにたえとたえにし山水のたれしのべとかこゑをきかせん(卷十五・恋五・九九〇番)

もとは、『大和物語』第二十三段に見える話であるが、そちらでは、「彈正尹元平親王」を「陽成院の二のみこ」(『新編日本古典文学全集』本二六九頁)と呼んでいるほか、「後蔭の中將のむすめに、年ごろすみたまひけるを、女五の宮

をえたてまつりたまひてのち、さらにとひたまはざりければ、いまはおはしますまじきなめりと、思ひ絶えて、いとあはれにてゐたまへりけるに」云々と、親王が訪れなくなつた事情も詳しく述べられている。同じ親王の話は、『大和物語』第七十八段と第七十九段にも、連続して収められていて、

監の命婦、朝拜の威儀の命婦にていでたりけるを、彈正の親王見たまひて、にはかにまどひ懸想したまひけり。御文ありける御返りごとに、

うちつけにまどふ心と聞くからになぐさめやすくおもほゆるかな

親王の御歌はいかがありけむ、忘れにけり。

また、おなじ親王に、おなじ女、

こりずまの浦にかづかむうきみるは浪さわがしくありこそはせめ (三〇五〜三〇六頁)
とあるが、いずれにせよ、色好みとして知られる存在であつたらしい。

彈正尹元平親王については、南波浩校註『大和物語(日本古典全書)』(一九六一年、朝日新聞社)や柿本奨著『大和物語の注釈と研究』(一九八一年、武蔵野書院)に詳しい。また、新田孝子著『大和物語の婚姻と第宅』(一九九八年、風間書房)所収の附表「清和―円融朝四省卿親王表」も至便である。それらによれば、生年未詳、天徳二年(九五八)五月薨去。陽成天皇の第二皇子であり、色好みで聞こえた兵部卿元良親王(生歿年、八九〇〜九四三)の同母弟に当たる。したがって、世代としては、徽子女王の父重明親王(生歿年、九〇六〜九五四)よりも、さらにひとつ前ということになるが、彈正尹在任の時期は、重明親王のほうだが、延長八年(九三〇)から承平七年(九三七)三月までと先行し、おそらくその後任として元平親王が、承平七年から天曆八年(九五四)頃に式部卿に転ずるまで(これまた、重明親王の後任であつたと思われる)、十八年の長きにわたつてその任にあつた。してみると、『ひとりごと』の齋宮女御に徽子女王の面影を重ねて、その父についても、重明親王の周辺に、実在の彈正親王を求めらるなら、この元平親

王の存在は、すこぶる注目には値するのではあるまいか。

さらに、徽子女王との接点は希薄ながら、和泉式部との浮名で知られる弾正宮、為尊親王（前述の、冷泉院の「三の宮」である）も、モデル候補に挙げられようか。じつは、**㊦**の返歌は、樋口氏の指摘にあったように、和泉式部の歌が本歌となつていろいろらしく、だとすれば、『ひとりごと』の作者の脳裏には、為尊親王のことが思い浮かぶ可能性が、十分に考えられるからである。いま、その歌を詞書とともに引用すれば、次のとおりである。

みちさだわすれてのち、みちのくにのかみにてくだりけるにつかはしける

和泉式部

もろともにたたましものをみちのくの衣のせきをよそにきくかな

（『詞花和歌集』巻六・別・一七三番。『和泉式部集』八三八番、詞書「みちのくにのかみにてたつをききて」）

これに対して、按察大納言女の返歌は、

もろともにたたましものをよそにのみ聞くぞかなしきがのうら波

とあり、和泉式部の歌とは、初二句が完全に一致するのみならず、「よそにきく」「よそにのみ聞く」という表現も重なる。念のため、『CD-ROM版新編国歌大観』を用いて、「もろともに」かつ「たたましものを」で検索しても、この二首以外にはヒットしない。和泉式部の歌は、寛弘元年（一〇〇四）、かつて夫であった橘道貞の陸奥守としての奥州下向に際し、別れた男との仲がさらに隔たりゆく寂しさを詠んだものであり、娘の伊勢下向に同道できない悲しさを詠んだ『ひとりごと』の歌とは、詠歌事情がまったく異なっているが、修辞法を見れば、「たたましものを」に「衣」の縁で「裁つ」を掛ける和泉式部詠のほうが先のように思われ、『ひとりごと』の歌は、その表現を借り用いたものであろう。

その和泉式部から連想される弾正尹為尊親王は、長保四年（一〇〇二）六月に、二十六歳の若さで薨じた。その放

蕩ぶりについては、『栄花物語』「みはてぬゆめ」巻に、「彈正宮いみじう色めかしうおはしまして、知る知らぬ分かぬ御心なり。世の中の騒がしきころ、夜夜中分かぬ御歩きもいとうしろめたげなり」(①一九三頁)とあり、その薨去を記す「とりべ野」巻には、「このほどは新中納言、和泉式部などに思いつきて、あさましきまでおはしましたる」(①三五七頁)とある。

『ひとりごと』の彈正親王は、按察大納言女との仲がしっくりゆかず、妻として遇することもなかったようであるが、そうした態度は、光源氏の六条御息所に対する仕打ちと、通うものがあつた。いっぽう、為尊親王は、『大鏡』兼家伝によれば、「童におはしましたし時、御かたちのうつくしげさは、測りも知らず、輝くところ見えさせたまひしか。御元服劣りの殊の外にせさせたまひにしをや」(新潮日本古典集成「本一九九頁」と描かれていて、「あげ劣りや」(『桐壺』巻①四六頁)との不安をたちまち払拭した光源氏ほどではないにせよ、美貌を謳われた人物であり、「御心の少し軽くおはします」(『大鏡』同右)という性格ともども、光源氏と二重写しになって、『ひとりごと』の彈正親王の人物像に反映しているのではないか、とも想像させる。とはいえ、物語の終わりのほうで、帰京後の前斎宮を入内させたのがかれだとすると、為尊親王のように早世したわけではないようである。

その実体が定かでないがゆえに、かえってあらぬ想像を掻き立てるところに、散逸物語研究のおもしろさと危うさが共存するわけであるが、こうしたモデル探しの興味を抱かせる作品は、そう多くはないように思う。本稿が、それこそ、ひとりよがりの妄想に終始していないか、諸賢のご批正を賜われれば、幸いである。(二〇〇二年十月稿)